## 第2章 久慈川の歴史・文化

## (1) 久慈川と人々との関わり

現在の久慈川流域の地形は、地質学的に、最後の海水面上昇が終り、海が退いた縄文時代に形づくられた。その後弥生時代に入ると稲作が伝わり、人々は高台から沖積平野に下りて稲作をはじめたと推察される。人々が久慈川との生活のかかわりをもつ様になったのは、この時代からと考えられる。

古代人の足跡は、出土した土器や石器及び古墳など様々な遺跡として今に伝えられている。村をつくり、豪族が生れ、そして常陸の国が出来た。

この地方の昔の様子を書き記した貴重な文献として、奈良時代に書かれたとされる「常陸国風土記」などがある。

## 1)「久慈」の名の由来

奈良時代の『常陸国風土記』には、久慈の地名の由来や川の様子が記されている。



「久慈」の名の由来とされる『鯨鯢の岡』〔常陸太田市(旧金砂郷町)〕

(平成14年撮影)



図 2-1 「鯨鯢の岡」位置

## 2) 久慈川の古代

久慈川に臨んだ木崎、額田、神崎地区等には、遺跡や古墳が多く分布している。これら遺跡等は台地で多く確認されている。人々は洪水が氾濫する低地を避け高台に住居を置き、川が氾濫する沖積平野では稲作を行い、川では魚介類を採取していた。こうした遺跡や文献により、当時の人々が久慈川に対して抱いた恵みと恐れをうかがい知ることができる。

# **梵天山古墳**

常陸太田市島町にある古墳で、13 基の高塚墳と百穴とよばれる横穴群よりできている。この古墳群を梵天山古墳群とよんでいる。主墳は梵天山古墳で、全長 151m で、茨城県では石岡市の舟塚山古墳(全長 182m)に次ぐ大規模な前方後円墳である。古墳時代前期の古墳と推定される。この古墳は当時、豊かな久慈川の水田地帯を控え,大きな勢力をもっていた久首 置造舟瀬足尼)の墓と考えられている。宝金剛院性海寺のすぐ北側にある。昭和 28 年 7 月 9 日、茨城県指定文化財(史跡)に指定された。



図 2-2 梵天山古墳位置



梵天山古墳入口(常陸太田市)

#### 川の恵み・鮎・鮭

『常陸国風土記』では、当時の人々の暮らしを窺い知ることもできる。

「都の北二里に山田の里あり。多く墾苗(新田のこと)となれり。あらゆる清き河は、紫鷺、北の山におこり、近く都で繋がの南を経て、久慈の河に会う。多く年盤を取る。大きさが腕のごとし」。アユは奈良時代から漁労の対象であったことがわかる。また、秋に産卵のため遡上する鮭は、捕獲が容易であるので、古代より人々の貴重なタンパク源であったと考えられる。この鮭をめぐっては、戦国期には下流の石神城主と上流の額田城主の間で争いが起こり、半月交代で鮭を捕る協定を結び、お互いに留や堰を造った。石神方では「鰡」と呼び、額田方では「塩」と呼んだ。下流より1の留、2の留、3の留、4の堰、5の堰、6の堰を造った。那珂市本光崎の『四塩』という地名は、当時の名残である。

# 読りの歌

奈良時代には、わが国を外敵から守るため、東国から多くの若者たちが徴収され、はるか西の果ての筑紫国(北九州)まで、防人として派遣された。だが、こうした若者たちに、無事に故郷へ帰れる保障はなかった。『万葉集』には、それぞれの故郷から出征した若者たちの離別の歌が、数多く収録されている。丸子部佐壮は、久慈川のほとりから防人として出征した若者の一人で、「久慈川」に託して次のように詠んだ。

# 久慈川は 幸くあり待て 瀬舟に ま梶しじ費き 我は帰り来む

「久慈川よ、清い流れのままで変わらず待っていてくれ。私は潮舟に梶〔糴〕をいっぱい通し急いで、帰ってこよう」 いま、幸久橋のほとりには、この歌を記した碑文が建っている。



久慈防人の碑(常陸太田市)

## 久慈防人の碑

整久橋のすぐ側の堤防上に建てられている「久慈防人の碑」。明治 13 年、この場所に、上河合村と額田村が共同で久慈川最初の橋を架けることになった。しかし、橋の名で争いが起き、ことは県令のところに持ち込まれた。県令はそのとき県属をしていた野口雨情の叔父の野口勝一に相談した。勝一は教養人だったので、すぐさま丸子部佐壮の歌を思い起こし、「さけく」は「幸久」に通じるとしてこの名を推薦し、結局これが採用された。のち、上河合、下河合、藤田、島、粟原の 5 村合併でできた村も幸久村と名づけられた。幸久村は昭和 29 年の町村合併で常陸太田市に属することになった。

## 3) 久慈川流域と佐竹氏

## 佐竹氏

中世の久慈川流域の常陸の国一帯は、清和源氏の末裔とされる佐竹一族が支配していた。 佐竹氏は太田に城を構え、常陸の国に広く権勢を張っていた。とくに戦国時代の第20代佐竹 義宣は秀吉の小田原上攻めに武勲を立て、常陸国奥7郡、下野国、奥州の1部を領地とし、 文禄4年(1595)には54万石の領国を持ち、豊臣6大名の一人と数えられるほどの大大名となった。秀吉死後家康によって秋田の久保田城に国替えになり、久慈川流域の佐竹氏の支配は 終焉する。久慈川流域には佐竹氏の奥州進攻に際して築城したり、その後の領国支配のため の出城など、佐竹氏ゆかりの城跡が多数見られる。代表的なものとして、棚倉町の赤館城跡、 棚倉城址、塙町の羽黒山城址、矢祭町の東館城址、大子町の大子城址,常陸大宮市(旧山方町) の御城址、常陸太田市(旧金砂郷町)の金砂山城、常陸大宮市(旧大宮町)の部 並城址、常陸太田市の馬坂城址などなどがある。

## 根小屋川

久慈川の源は、八溝山に発する。本流は八溝山の北面を下り、「投河内で白子川を合わせ棚倉、塙、矢祭町に流れる。もう一つの久慈川源流は八溝川である。これは八溝山の南面を下り、大子町下野宮で本川に合流する。福島県側の北側にもう一本、分水嶺を超えて久慈川に流れる川がある。これが根小屋川である。これは人工的に分水嶺を開削して久慈川に流れ込む川である。

『棚倉町史』一巻に「天正4年(1576)19代佐竹義重が赤館を奪った時、会津の芦名盛公が 此事を聞いて大いに怒って、南郷を水攻めにせんとして、北郷にある阿武隈川支流の社川に 玉野堰を設け、分水嶺の山を掘り切って一挙に水を引き入れるため作った戦略上の川が、根 小屋川である」とある。およそ400年前に堰から合流点までの10kmの開削は大土木工事であったと思われる。上流の檜木川と下流の根子屋川は棚倉城の濠に水を供給し、干ばつ時には堀の水は下流の水田に供給されてきた。

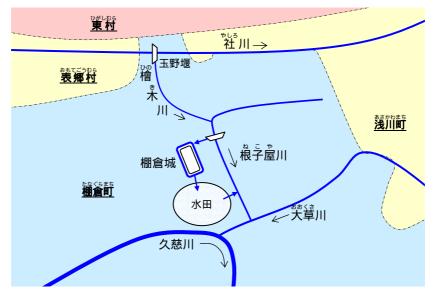


図 2-3 根子屋川周辺の河川

## 4) 天狗党

江戸幕末、水戸藩内で尊皇攘夷を唱えた武田耕雲斎、藤田小四郎らによる天狗党は、元 治元年(1864)筑波山で挙兵し、常陸国を中心に各地を転戦し幕府軍と戦った。最後は悲

劇的な結末となった彼らの足跡を、久慈川流域の各地で見る事が出来る。

久慈川上流の棚倉町設河内には、八溝山で戦い敗れ棚 倉藩に処刑された兵士たちの「天狗党の墓」がある。ま た天狗党の別働隊として水戸藩内各地を転戦し、塙の代 官所で処刑された田中協蔵の刑場跡が、塙町の久慈川の ほとりに碑として残されている。

田中市

「田中愿蔵刑場跡」の碑(塙町)

## (2) 久慈川にまつわる信仰と祭り

久慈川は人々の生活に恵みをもたらすと同時に「恐ろしい川」でもあった。人知の及ばぬ自然の力としての水への恐れは、神への恵みと安全への祈願となった。また、川の水が少なくなった時には、雨乞いや愛をして神に祈った。久慈川沿岸の農村地帯では、豊穣を祈ると同時に土地が安らかであり、災厄が訪れないようにという人々の素朴な祈りがこめられた祭礼が今でも継承されている。

## 1)八溝山と信仰

八溝山の山頂には、八溝嶺神社が建立されている。茨城,栃木,福島三県にまたがる久慈川の水源地の八溝山は水を恵む霊山として信仰され、江戸時代には山麓の村々の総鎮守的存在であったという。社伝によると、日本武尊が東国平定の際に神を祭ったのが始まりとされ、歴史的にも10世紀の「延喜式神名帳」にも名前が載っている古い式内社である。

八溝嶺神社の一の鳥居が山麓の棚倉町大岩平集落にある。ここには久慈川の名をとった久慈川上神社があり、八溝山入山への里の入り口となっている。この神社は戦国時代佐竹氏による建立とも言われており、以来 400 年間農業の神として人々の信仰を集めている。

## 2)水神さま

久慈川流域では、水害から集落を守って くれる神様として、また地域に恵みをもた らす神様として水神さま信仰が広範に見 られ、これは今も続いているものが多い。 那珂町額田北郷、常陸太田市上河合町舟渡、 常陸大宮市上大賀(旧大宮町久慈岡)常 陸大宮市舟生(旧山方町舟生)など各地に あり、それぞれの集落では持ち回りで当番 を決めて小規模な祭礼をおこなっている。



舟生の水神さま(常陸大宮市,旧山方町)

## 3)可恐碑

大子町の久野瀬の諏訪神社に、「奇逸」と彫りこまれた高さ60センチほどの碑文があり、「明治二十三年八月七日 久慈川洪水ここを浸す ただし平水より増すこと二十尺」と刻まれている。二十尺は約6mであり、未曾有の大洪水であったことがわかる。袋田駅踏み切り近くの旧道の岩上にも同名の碑文がある。



可恐碑(大子町)

## 4) 金砂神社の大祭礼

常陸太田市上宮河内町にある西金砂神社と、常陸太田市天下野町にある東金砂神社の大祭礼が平成 15 年 3 月にとり行われた。これは 72 年に 1 度行われるという珍しい祭りである。両神社から日立市の水木浜まで約 50km の道のりを 6 泊 7 日かけて、神輿の渡御行列が練り歩き、各地で神事、田楽などを奉納する。祭りの行列は水木浜で海水を汲んで神体を清める。

伝説によると、西金砂神社の神は女神で、東金砂神社の神に嫁いで夫婦になったとされ、この二神が協力して国を治め、天下太平、五穀豊穣、万民豊楽を祈願するとされている。西金砂神社の田楽は「四方固め」「獅子舞」「種まき」「一本高足」の4段からなり、悪霊を鎮め、神々の恩恵を祈願し、豊穣を祈る。





四方固め

獅子舞





種まき

一本高足

図 2-4 金砂神社の大祭礼の様子(昭和6年)

(金砂郷村史編さん委員会,「西金砂の祭礼と田楽-古代から現代まで-」より)

図 2-4 は昭和 6 年に行われた西金砂神社の田楽の写真である。左上は猿田彦命の面をつけておこなう「四方固め」、右上は田畑を荒らす獅子(猪)を懲らしめる「獅子舞い」である。左下は「種子まき」で、この段は田起し、種子まき、稲こきの 3 場面からなっている。右下は武徳龍命を表わし、豊穣を祝して踊る「一本高足」である。

## 5)近津神社の「お田植え祭り」

久慈川の上流域の棚倉や大子には都都古分神社が3社ある。棚倉町馬場にある上の宮神社、棚倉町八槻の八槻都都古分神社、大子町下野宮にあり近津神社と呼ばれている下の宮神社である。都都古分神社も10世紀の「延喜式神名帳」に記録されており、古くより八溝山信仰と結びついているとされている。うち八槻(毎年旧正月六日)と下野宮(夏至の日)の二社では、豊穣を祈願する「お田植え祭り」がおこなわれる。下野宮の祭礼では、神事のあと、苗取り歌が歌われ、早乙女がこれに合わせて神田に入って田植えをおこなう。参詣人は神社の苗をもらい、境内の寒竹を持ち帰る。苗は豊作を祈って自分の田に植え、寒竹は神棚にそなえる。



下野宮近津神社の「お田植え祭り」(大子町) (写真提供:大子町)

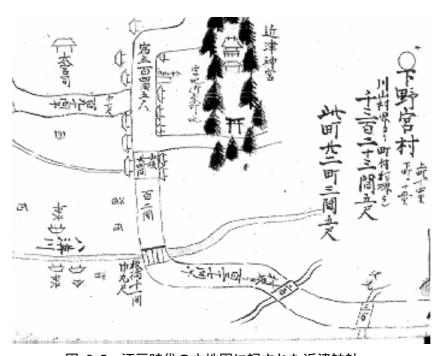


図 2-5 江戸時代の古地図に記された近津神社 (加藤寛斎,「常陸国北郡里程間数の記」より)

## (3)舟運

かつての久慈川は、舟運による輸送が活発に行われた。久慈川の荷は直接海には出ないで、 途中で陸揚げされ、再び那珂川を下ったのが特徴である。

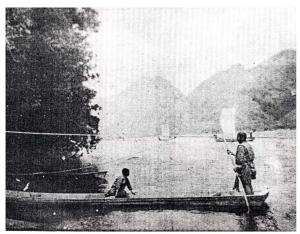
## 1)河岸(かし)

久慈川の本格的な舟運は江戸時代の文政3年(1820)、棚倉藩の川下村の重郎次が塙代官所に久慈川通船許可願いを出したことを契機にはじまる。当時、塙は天領になっていて、そのため、御城米は以前のように棚倉に納めるのではなく、南方の常陸太田市(旧里美村)徳田町まで明神峠を越して運び、さらに那珂川の枝川河岸まで陸路で運搬しなければならず、農民たちの大きな負担になっていた。この許可願いは水戸藩および関係する15カ村の間で検討されて、最終的に通船が決定したのは21年後の天保12年(1841)であった。重郎次は荷物の手数料の2割を15カ村に納めること、村々が手持ち船で物資を運送するのは自由であること、また簗(やな)は通船に支障のないよう設置すべきことなどを決めた。河岸には専門の運搬業者が生まれ、河岸株に対する運上金、冥加金などを藩に納めた。

上納米は下野宮まで舟、そこから資藤までは筏、その先は再び舟で山芳河岸または高和南河岸まで運ばれ、そこで陸揚げされて牛馬を用い、那珂川の小野河岸まで運ばれ、再び舟で水戸城下や遠く江戸まで運ばれた。山方の河岸は今の常陸大宮市(旧山方町)の岩井橋のたもとに設けられたという。下り荷は上納米、商人米、和紙、楮(こうぞ)、コンニャク粉、木材、タバコ、茶、

醤油、酒など、上り荷は塩、海産物、衣類、日用雑 貨などだった。

これに使われた舟は「高瀬舟」と呼ばれ、全長六間(10.8m) 幅二間(3.6m) 船頭は4人、人なら30人くらい乗れ、コンニャク粉40俵を運ぶことができたという。順風時の遡上には帆を使用した。しかしこの舟運も、大正から昭和にかけて水郡線が開通して急速に衰退した。



久慈川を上る高瀬舟(常陸大宮市、旧山方町) (「山方町誌」より)



図 2-6 久慈川の舟運と河岸

## 2)渡し

橋のない場所では、久慈川には各所に、対岸との行き来の暮らしの必要から生まれた渡しが設けられていた。しかし今はすべて廃止され、元の渡船場跡も忘れ去られている。わずかに大子町 環藤の川下地区に碑が残るが、常陸太田市(旧金砂郷町)小島町の渡船場、元の棚倉街道に位置していた額面の舟渡しなど、名前を古老が知るのみで、正確な位置さえわからなくなってしまっている。

額田の渡しは、水戸から奥州へ通じる棚倉街道の交通の要所に位置し、久慈川の渡しの中でも 重要な場所であった。額田は宿場町として栄え、また戦国期には、佐竹義直(1249-1255)が額 田城を築城して城下町としても栄えた。

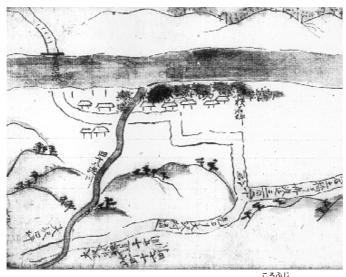


図 2-7 江戸時代の古地図に記された頃藤の渡し (加藤寛斎,「常陸国北郡里程間数之記」より)



頃藤の渡し跡(大子町)

## (4)川と生活

かつての久慈川沿いでは、漁業の他さまざまな地場産業が栄え、そのうちのいくつかは今も脈々と生き続けている。川とかかわりの深い地場の産業と地域に残る伝統漁業について以下に記す。

# 1) 西ノ内紙

かつて久慈、那珂地方で生産される和紙は西ノ内紙と呼ばれ、美濃紙、越前奉書とならんで 日本三大和紙の一つに数えられた。常陸大宮市(旧山方町)西野内には久慈・那珂両郡の各地 で生産された和紙を一手に扱う問屋があり、久慈川の舟運を利用して水戸や江戸に出荷された。

原料には、楮だけを用い、虫がつかず、丈夫だったので、商家の大福帳に重用された。常陸大宮市(旧山方町) 円生の久慈川べりには、あたりの農家の人たちが「川さらし」に用いた「紙漉き岩」が残る。 舟生には紙漉きの伝統を伝えようと、「かみの里和紙資料館」がある。 1971 年県指定無形文化財、1977 年国選択無形文化財に指定された。



舟生の「紙漉き岩」(常陸大宮市,(旧山方町))

#### 2)額田の建具

那珂市(旧那珂町)額田は中世の城郭跡も残る歴史のある土地として知られるが、現在は木工業者の多い地区としても有名である。ことの起りは明治初期、額田の久慈川べりの労声の河岸が、大子や上小川方面から筏に組んで運ばれた木材の陸揚げ場として繁昌したため、ここに製材所ができ、大量の廃材が出たためで、それを利用する建具業が起ったのである。そして大

正12年の関東大震災を契機に飛躍的に発展し、最盛期には40~50軒の建具業者が軒を連ねたという。しかし、水郡線の水戸~下小川間の開通、辰ノ口堰の改修工事による筏輸送の困難等により、昭和初期には筏による木材輸送は廃止された。そしてたびたびの水害、木製品加工業の不振により、上流から来ていた建具業者は帰り、舟戸の業者も現在の高台にある古宿の地に引き上げてしまった。



額田の製材所(那珂市)

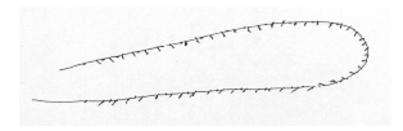
## 3) 伝統漁業

久慈川流域にはアユ、サケ、コイ、フナ、アイソ (ウグイ) などさまざまな魚を対象に多くの伝統漁法が残されている。

# アユの鵜縄漁

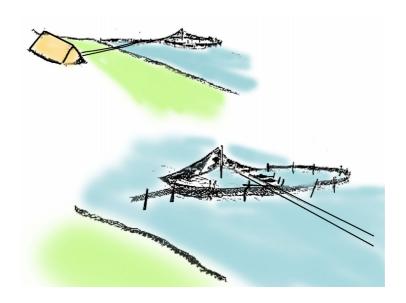
久慈川流域でかつておこなわれた伝統漁法のひとつで、鵜や鴉の黒い羽をむすびつけた長い縄を舟から下ろし、半円を描くようにして岸辺へ寄せる。驚いたアユは縄の内側へ追い込まれるので、そこに投網を打って捕獲する。縄には扁平な石を 20 個ほど結びつけて、錘として用いた。





# サケの電漁

常陸大宮市(旧山方町)の岩崎堰より下流でおこなわれる漁。川下に開口するように半円形をなして杭を打ち、網を張る。この網の中に一部のサケを入れておく。産卵のためにサケが囮に寄ってくると、川底に仕掛けた脈糸に触れ、河原の小屋に結びつけた鈴が鳴る。そのとき開口部に吊ってあった袋状の網を落として捕獲する。



## サケ建網漁

毎年 10 月 26 日から 12 月 25 日まで、久慈大橋の上流側でおこなわれる。川を横切って杭を打ち込み、淳子を付けた網を設置する。遡上するサケがかかるのを小屋で待ち、浮子の当たりをみて、舟を漕ぎ出して捕獲する。

現在、ここで捕獲したサケは、常陸大宮 市(旧大宮町)富岡のサケ孵化場で人工孵 化させ、春先に富岡橋付近で放流されてい る。



サケ建網漁の様子(東海村)

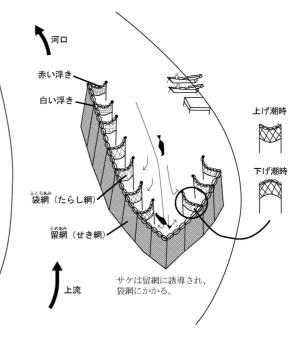


図 2-8 サケ建網漁

#### アイソの石室漁

アイソ(ウグイ)の産卵期の5月ごろにおもに中流域でおこなわれ、「瀬付け」ともいう。 早瀬のへりにアイソの産卵床を人工的に作り、そこに集まった魚を投網で捕獲する。産卵床の 作り方は、木の杭を打ち、そのすぐ下流部に砂利を盛って一定面積の瀬をつくる方法や、大き な石をかき集め、高さ1mほどの小山を作ってその下流部に小石を敷く方法など、いろいろな 方法がある。

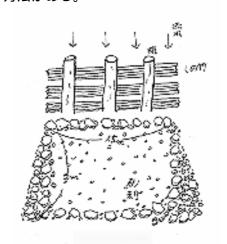




図 2-9 アイソ漁の瀬の作り方2種